

所長退任にあたって

廣井 善二

2026 年 3 月をもって 3 年間勤めた所長を退任しましたので、最後に一筆書かせていただきます。同時に定年退職となりましたが、そちらの感想は本号後半の「定年退職を迎えて」に記します。2023 年度の物性研だより第 1 号の「所長就任にあたって」を読み返してみると、東條會館(千鳥ヶ淵の西にあり、ここで写真を撮ると幸せが訪れるらしい)での「所長写真」撮影から始まった所長業の行く末を案ずる気持ちが蘇ってきて感慨深いものがあります。そこで事の顛末は 3 年後のこの記事に書くこととあり、この 4 月に実行に移すことと相成りました。しばしの間、お付き合いください。

私にとって所長業は新鮮で貴重な体験の連続でした。4 月の武道館での東大入学式ではガウンを羽織って壇上に上がり、名前を呼ばれて一礼しましたが、表情が硬かったとお叱りを受けました。コロナ禍でオンラインになっていた所員会はその 4 分の 1 を対面開催に戻し、1 週間前の企画委員会と合わせて毎月の準備に追われました。様々な短期研究会や ISSP ワークショップがある毎に挨拶に駆け出され、ガイダンスや東大 EMP など多くのイベントで所の紹介を、パーティーがあれば乾杯の音頭を、厄介ごとが起これば対応の相談にと目まぐるしく役割が入れ変わりました。所長として決断を迫られる場面も多く、先延ばしにはできない状況が続きました。しかしながら正直言って私はその状況を心から楽しむことができたと思います。退職間際で自己の研究室が店仕舞に入っていた(つまり暇だった)ことに加え、所内や特に学内の「楽しい」会議がほぼオンライン開催であったことがその主な要因でした。コロナ禍に確立されたこの ZOOM 体制は柏の部局長にとって大きなメリットです。本郷に通うために無駄にしていた時間を有効に使って所の運営に思いを馳せ、新たな試み(思いつき)に挑戦することができました。

私が所長として行った最大の事業は第 4 世代物性研の構築に向けた改組でした。前回改組から 30 年が経過した現状において組織の改変は不可避と考え、「拡がる物質科学」をモットーに組織改革を進めました。理論以外のそれぞれ 2 つの研究部門とグループをシャッフルし、ある程度現状を踏まえて将来に伸び代のある 2 つの部門として、先端計

測研究部門と多様物性研究部門を立ち上げました。また物質設計評価施設と計算物質科学研究センターから新たに物質創成研究センターと数値物性科学研究施設が立ち上がりました。さらに微細加工技術を駆使する人達が集まって量子ナノ物性研究センターが生まれました。このセンターは学内のクリーンルーム協働を見据えた新組織であり、今後の物性研を引っ張っていく強い牽引力の一つとなることが期待されます。本改組の成否は数年以上後になって分かるものですが、物性研の発展に繋がっていくことを祈っております。

新たな試みとして、従来の Q ナノラボ基金に加えて物性科学研究教育助成基金を立ち上げ、寄付者への感謝の印として本館 A 棟玄関に周期表銘板を設置しました。卒業生、関連研究者、企業、団体からのご寄付を何卒よろしくお願い申し上げます。本基金をもとに、昨今のオンライン会議の一般化を踏まえて助教や学生など誰もが使いやすい個人用 ZOOM ブースを導入し、この 4 月から運用が始まっています。また、所関係者による執筆物や講義資料などの貴重な電子ファイルを共有して後世に残すための Web サイトとして ISSP Note Collection を立ち上げました。例えば出版社の都合によりすぐに絶版にされかねない優れた専門書が多くの人目に触れて広く読まれるようになると期待しています。是非、積極的な投稿をお願いします。一方、この 3 月末には学生の研究へのモチベーションを高め、互いの研究内容を知る機会として学生プレゼンコンペを行い、大いに盛り上がりました。これらの試みが今後も所の発展に役立っていくことを期待しています。

最後の 2025 年度には柏キャンパスの共同学術経営委員会の長を仰せつかりました。本郷や駒場と異なり、比較的新しい柏キャンパスの住人達の結束は強く、率直な意見交換を行う場となりました。唯一心残りなのは「柏プラネットビル構想」の目途が立たなかったことです。本学の国際卓越研究大学計画において柏キャンパスに与えられたお題目は「プラネット」であり、もし計画がゴーしていたら柏キャンパス正面入り口左のオープンスペースに、新たにシンボリックな建物を作る構想が動き出していたことでしょう。国際卓越計画の中心課題である融合研究の促進を柏の

東京大学は現在、非常に厳しい状況に置かれています。財務上の問題から物性研もこの3年間に亘って大幅な予算削減を強いられてきました。国際卓越認定の状況に依存しますが、本学の財務状況の改善は急務となっています。さらに本部は部局人事の一元化を進めており、今後は所のみの判断で自由に行う人事を行うことができなくなる可能性が高くなっています。一方2026年9月には次期総長が選出され、来年度から新たな体制に移行することが大きな不確定要因です。東大の一部局である物性研の将来も流動的とならざるを得ず、今後の情勢の変化をよく見極め、所にとって最善の策を選択していくことが求められます。このような厳しい状況で物性研を去ることは心残りではありますが無責任に気楽でもあります。今後は小林洋平所長の下、所を支えていく皆様のご健闘を心からお祈りします。

最後になりましたが、物性研協議会、人事選考協議会、共同利用施設専門委員会、各種運営委員会においてご協力いただきました多くの外部委員の皆様には御礼申し上げます。特に人事選考協議会委員の皆様には多くの人事案件をご担当いただき、心から感謝します。所の運営に関しましては副所長、歴代の企画委員、URA、技術部、事務長および事務職員など多数の皆様にご助けていただきましたことに深く感謝します。さらにその他全ての教職員、研究員、学生のみなさんとはこの3年間を共に楽しく無事に過ごせたことを有り難く思います。今後も物性研がますます発展していくことを祈念して筆を置きます。